

桜蔭俳話会 通信句会(第一一五回 平成二十六年秋)  
高得点句 自句自解

八点

① 名水を汲む人の列こぼれ萩

辻 幸子

京都梨木神社で作った句です。あふれるほどの萩が咲く参道の脇に井戸があり近くの人たちが水を汲みに来ていました。京都三名水のひとつだそうです。

① 小春日の赤子この世の匂ひ持ち

恩田 才美

お隣りの新築家に赤ちゃんが生まれ、暖かい或日、ご挨拶に来られました。久しぶりに身近で会う赤ちゃんに、いとけなき者の愛しさばかりではなく、生きとし生けるものの明日をも感じたものです。

七点

③ 秋冷やいのち呑みたる山ひとつ

柏尾のり子

御嶽山の噴火の犠牲者の一人は、同じマンションの三十九歳の男性でした。お母様は二十年前に亡くなられていて、父子二人暮らしたので後にはお父様だけが残されたのです。思いがけない悲しい出来事への追悼の気持ちで作りました。

木の実降る水に遅れて流れけり

増田 守

川沿いの道を歩いていて。水面に落ちた木の実は、一瞬沈んだ後、浮かび上がり、水に流されて行った。客観的に見た木の実の挙動を、一つの時間軸に投影して詠んだもの。

六点

① とりあえず羽織るもの欲し冬支度

池田 弘子

急に肌寒くなり、一寸何か羽織るものを探し、いよいよ冬物と入れ替えしなければと口をついて出た。そのままの句です。

晩秋の物流の基地貨車の列

古野 明美

晩秋の土曜日、町へ行く路線バスに飛び乗った。週末には、高速道路を経由して町へ行く路線

バスが運行されるからである。小さな食品ストアが一軒あるこのエリアの住人達は、生活用品を補充するため、時々、対岸へ、或いは、湾岸沿いに、出掛ける事になる。バスが高速道路へ入ると、やがて、高速の下には、物流の基地が見えて来る。

右側には海が見え、箱崎埠頭と倉庫群が広がる。左側には、JRの貨物の基地が広がり、積み上げられたコンテナと貨車の列が見える。貨車は、何処かへコンテナを運び、いずれ又、この場所へもどってくるのであろう。

ずっと昔、数十倍も長い貨車の列を見た事があった。その貨車には、沢山の石炭が積まれている。石炭を積んだ貨車は一瞬にして、走り抜け、歴史の片隅へ走り去ってしまった。現代の貨車の基地を眺めながら、昔を偲んでいると、バスは、早くも、高速を下り、町へと入って行ったのである。

五点

③ 葛紅葉開くことのなき小窓かな

辻 幸子

近所のお宅の玄関の横に物置らしい建物があります。小さな窓のある、その建物には葛がいつぱいからまっついていて、四季折々いろいろな表情を見せてくれます。

① 葛の花こぼるる沢や昼の月

佐渡谷 秀一

句会の兼題に「葛の花」が出され、散歩がてら等々力溪谷あたりを回っている際浮かんだ句の一つ。谷とせず、沢としたことで水の流れの動きと音が呼び起こされたかと思う。

天高しカーブの先の一号車

柏尾のり子

先日、大磯に出かけた時の句です。澄んだ青空の日で、小旅行気分でワクワク。大きなカーブを曲がる時、窓から自分の乗っている電車の一号車が見えました。電車の先頭が見えるのは、何となくうれいもので、遠足の小学生のような気持ちになりました。昔の蒸気機関車なら手を振ったところですよ。

採血の利き腕白し藍の花

増田 守

現役として日夜仕事に没頭していたとき、パソコン入力や図面作成などに大活躍してくれた利き腕。数年前に慢性の難病を宣告された。採血のため捲り上げた利き腕の白さに、この間における人生の空白を感じる。藍は、開花の直前に葉が収穫され、多くの手間と時間を掛けて染料となる。人生を彩と実りあるものとして完結させたいものである。